

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02210

研究課題名(和文) 東アジアから考える日本ナショナリズム論 - 戦争の記憶・表象の比較思想史研究として

研究課題名(英文) A Perspective on Nationalism in Japan from East Asia

研究代表者

樋口 浩造 (Higuchi, Kozo)

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：30243140

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：主な成果として「東アジア冷戦体制と日本 東アジアにおけるそれぞれの戦後から」を、スペイン語版「El Esquema de la Guerra Fria en Asia Oriental y Japon: las Respectives osguerras en los Paises de Resgion」とともに大学の紀要に発表した。国際シンポでの報告をもとに、東アジアの戦後冷戦体制を、日本を浮かび上がらせるようにして振り返った。また、『暴力をめぐる哲学』を共同編集し、「暴力を直視する一語り直される暴力をめぐる」を執筆し、これまでの中国でのフィールドワークに基づいた議論を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東アジア諸国・地域を念頭に置きながら、日本のナショナリズムについて批判的に考察してきた。その際に、戦争の記憶のされかたや実際の戦争遺跡、戦争記念館に注目する方法をとってきた。これらは一国に閉じないナショナリズム研究として、今後も有用な研究となると考えている。

研究成果の概要(英文)：I wrote the two papers. One is 「The Cold War System In East Asia and Japan」, and another one is [The Violence Faced by nationals]

研究分野：日本思想史

キーワード：ナショナリズム 東アジア 暴力 靖国

1. 研究開始当初の背景

科学研究費補助金 基盤研究(c)「ナショナリズムと近世儒教 「自国意識」をめぐる日朝比較思想史」「近世の自国意識とナショナリズム 「アジア」を語る自他認識の変容と展開」の二つの科研補助金をもとに『江戸の批判的系譜学』を成果として刊行した。その際の副題は「ナショナリズムの思想史」であった。これ以降近代のナショナリズムを問題としながら研究を続けてきた。基盤研究(c)「日本ナショナリズムと戦後思想 - 戦争の記憶・表象に関する比較思想史的研究」および、基盤研究(c)「戦後日本ナショナリズム論 - 戦争の集合的記憶に関する日中比較思想史的研究」は、本研究の前提となる、東アジアに開かれたナショナリズム研究の模索の過程である。この間、中国をはじめとする多くの戦争記念館、戦争遺跡を訪ね、ナショナリズムが歴史認識とどのようにかわるかを、比較思想史的に考察してきた。

そして徐々に現代に関心を移行させ、現在のナショナリズムをも射程に入れた研究の必要を感じるようになった。

2. 研究の目的

戦後日本の思想史上の問題を東アジアに開かれた日本ナショナリズム論として考察する。戦後民主主義を問うために三つの柱で本研究を構成する。

戦後思想の中心的役割を果たしてきた丸山真男等知識人の思想的テクストを、反戦平和の思想とナショナリズムとの関係から分析する。

同時に、東アジアの戦争記念館を比較思想史的に分析する。日本における特殊「靖国」問題を、東アジアに共通する戦没者と国民との関係の問題として議論していく中で、特に昨今の各国における排外的なナショナリズムの高まりと戦争の記憶のあり方にも注視していく。

全国各地の戦争記念碑や記念館等を調査し、草の根で受容される戦争の記憶を検討し、頂点思想家のテクスト分析と、フィールドワークによる草の根の思想分析との交差点を探る。

の実現のために、ナショナリズムの中でも、いわゆる「健全」と称されるナショナリズムについて考察を加える。幕末以来の中央集権国家を建設しようとするナショナリズムは、従来「健全」なるものとして議論され、それが「排外的」で「超国家主義的」なものに変質したとする通説的理解があるように思われる。しかし本研究は、こうした立場をとらない。「健全な」ナショナリズムの我々意識のうちにこそ、現在を含む戦後社会の問題が胚胎していると考えらるからである。戦後の社会の在り方を根底から問い直すような視線を獲得するためには、戦後民主主義を支えてきた「健全な」ナショナリズムへの問いが不可欠であるとする認識に本研究は支えられており、それがこの研究の第一の目的でもある。手放して迎えられた戦後民主主義自体の功罪を冷静に分析すべき時期に来ているのではないだろうか。こうした立場にたつて、戦後知識人の発言をあらためて分析していく。また、こうした立場に立つことを通じて、歴史修正主義との真の対決も可能になるものと考えている。

の目的は、ナショナリズムを戦没者祭祀や戦争の記憶の問題として考察することである。東アジアの戦争記念館、博物館の歴史表象と国内の遊就館をはじめとする諸施設の展示表象とを比較検討することを合わせて行いながら、それぞれの国家・地域が戦争の記憶・表象を通じてどのように国民形成を行っているのかを検証し、東アジアで唯一戦後民主主義体制下にあった日本ナショナリズムの特色を浮かび上がらせたい。それは同時に、東アジアにおける日本の国民形成の特徴を考察することでもある。こうした研究を通じて、日本の戦後民主主義の質を問い直すことが、本研究の目的であ

る。

頂点思想家のテキスト分析と、社会的に流布する戦争の記憶との交差点あるいは落差を探ることも本研究の目的のひとつである。アカデミズムの生み出す平和思想やナショナリズムの主張の検討はもちろん重要であるが、人々のあいだに流布されていく戦争記念館や記念碑の思想が置き去りにされてはならないと考える。この両者を同時並行的に分析していくことで、時代思潮をより広い視野から捉える方法的な模索を行うこともまた本研究の目的である。平和国家日本をめぐる知識人の発言と、おそらくそれらとは大きな落差をとめないながら作られていく戦争記念館の思想を、そのどちらもが戦後日本のナショナリズムの形成に参与してきたとする見通しのもと考察を加えていく。そうした新しい取り組みを通じて、日本におけるヘイトスピーチや、東アジアでの戦後補償や領土に関する排外的なナショナリズムの台頭を問題化することを試みていく。

3. 研究の方法

テキスト論のための資料収集と、戦争博物館等での集中的な調査・資料収集を並行して行う。テキストの収集では、講座派関係の資料だけでも多岐・多数に上るため、それらができるかぎり網羅的に収集すると同時に、一方では戦没者関係の一般市場では入手困難な、たとえば靖国神社が発行している内部資料（一次資料）などの収集にも努めていく。また、戦後の冷戦体制下でのナショナリズムを考えるためには、天皇制を考察することを抜きにはできない。特に戦後天皇制を成立させた日本国憲法成立に焦点を当てる研究文献の収集と整理にも力を注ぎたい。そうした資料と研究文献から、憲法一条のもとでスタートした戦後の象徴天皇制下での靖国をはじめとする戦没者のための慰霊や記念の施設について考察を加えていく。それは、靖国神社と天皇制を通してみる、戦後日本の合意形成の問題であり、日本ナショナリズムのひとつの在り方を抽出する作業である。その前提となる問題意識として、戦後憲法は平和憲法といつ呼ばれるようになり定着したのかということに関する批判的な見通しがある。天皇の戦争責任を問う一条への批判的な言及が当時あり得たのだろうか。つまり憲法の問題は九条ではなく一条にあったのではという仮説のもと本研究を行っていきたい。

もう一方で、日本の主要な戦争記念館の主張を見ていくことを並行して行う。靖国の遊就館の展示はその典型例であるが、例えば鹿児島知覧の特攻平和会館や沖縄の平和祈念資料館、広島・長崎の原爆資料館など調査すべき対象は数多くつくられてきている。また、こうした知名度の高い資料館等とは別に、逆に政府からは取り残されてきた、空襲の被害者のための資料館や記念碑が全国の都市に散在していることにも注目したい。こうした、ナショナルな政策からは漏れ落ちた死没者に焦点を当てることで、国家的な観点からは切り捨てられた民間人死没者の問題や、軍人軍属だけが優遇されている現状が浮きぼりになるはずである。また全国に、例えば花岡をはじめ中国人強制連行を記憶に残そうとする地域や、朝鮮人が強制をとめないながら徴用された、鉱山をはじめとする現場が保存されている地域が多数ある。初年度は、主な記念館でいまだ調査できていないものを調査すると同時に、ナショナルな視点からは忘れ去られようとしている侵略戦争や植民地支配の記憶をとどめる場を、まずは愛知県立大学の地元である東海地域での掘り起こしから行っていきたい。地元の戦争遺跡の掘り起こしは、愛知県内では、知多半島の上海事変時の軍人人形、三ヶ根山のA級戦犯を祀る殉国七士の墓、あるいは大府市の飛行場建設のために行われた中国人強制連行など、地域を少し広げて、岐阜県及び

静岡県に残された日露戦争時の精巧な「英霊人形」の調査も文書資料が残されており、その収集・検討を行いたい。また東アジア各地の戦争記念館の調査は、初年度だけではとても無理だが、各年度に分散しながら調査に訪れたい。主なものを挙げると、台湾についての展示内容が変化した北京抗日戦争記念館とあるいは新たに花岡の展示が始まった天津の強制連行記念館、瀋陽 9・18 事変博物館、南京侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館と上海や南京に遺る慰安所の建物、韓国の独立記念館や安重根義士記念館、台湾の台北二二八記念館や国軍歴史博物館、香港の歴史博物館などが必見であると考えている。

4 . 研究成果

「東アジア冷戦体制と日本 東アジアにおけるそれぞれの戦後から」と題して、『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 第 18 号 (日本文化専攻編 第 8 号)』2017 年 3 月 p89~p97 に掲載された。またこれは同時にスペイン語の翻訳も掲載されている。

「El Esquema de la Guerra Fria en Asia Orientaly Japon: las Respectivas osguerras en los Países de Resgion 」(同上)p98~p110 この成果は、「日本スペイン比較人文社会シンポジウム」での報告と討議をもとにしたものである。

また、『暴力をめぐる哲学』編著が 2019 年に晃洋書房から刊行された。担当箇所「暴力を直視するー語り直される暴力をめぐって」(P160~p187)では個別論文も掲載した。

ナショナリズム論と広く東アジア的視野で論じる目論見からすれば、成果はわずかであった。2018 年からがんの闘病生活に入り、研究の進展は思うに任せず、中断せざるを得なかった。

しかし長年の中国での、また、国内各地でのフィールドワークの成果は着々と上がってきており、まとめに入る時期に来ている。成果を地域に関わりながら、また、アジアに目をやりながら公表し、世に問うべき時期に来ていると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 樋口浩造	4. 巻 8
2. 論文標題 東アジア冷戦体制と日本 - 東アジアにおけるそれぞれの戦後から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 日本文化専攻編	6. 最初と最後の頁 89 ~ 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi/10.15088/00003161	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kozo Higuchi	4. 巻 8
2. 論文標題 El Esquema de la Guerra Fria en Asia Oriental y Japon: las Respectivas Posguerras en los Paises de la Region	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 日本文化専攻編	6. 最初と最後の頁 98 ~ 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi/10.15088/00003161	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 飯野勝己・樋口浩造	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 291
3. 書名 暴力をめぐる哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----